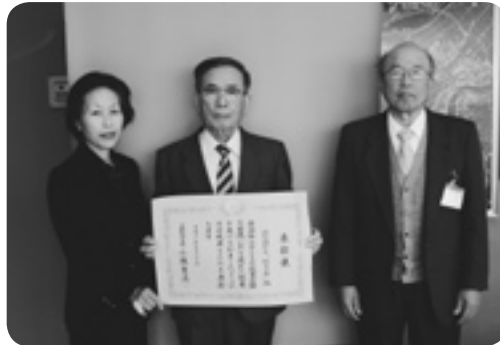


時代を超えて輝く読書の価値

『虹の会』に文部科学大臣表彰

市で活躍する、本の読み聞かせボランティアグループ「虹の会」(代表Ⅱ大内則雄氏)が、文部科学大臣表彰を受賞しました。文部科学省では、「子どもの読書活動優秀実践団体(者)表彰」として、子どもが積極的に読書活動を行う意欲を高める活動について、優れた実践を行っている団体(者)に対して表彰を行っています。



写真右から菊地図書館長、虹の会大内会長、藤野さん



保育所での読み聞かせの様子

「虹の会」

市立図書館を起点にして活動する図書館の外郭団体。図書館の呼びかけで読み聞かせボランティアを募集し、集まった方々によって平成5年に発足。主婦の方を中心に、4月現在で会員数は27人。

幼児期からテレビやゲームなどに慣れ、読書体験が少なく、本離れが深刻となっている子どもたちに、読書の楽しさや味わい、感動の心を読む習慣化につなげようと、地域小学校向けのミニ移動図書館併設読み聞かせ・朝の15分読書などに年間200回余りの活動を重ねています。

活動の内容は、本の読み聞かせのほか、ストーリーテリング、紙芝居、ブックシアター、影絵など幅広く行い、図書館内での定例会、小学校、幼稚園、保育所、福祉施設などからの要望に応じて市内外を問わず活動を展開しています。

今回の受賞に当たり、大内会長の話をお聞きしましたので、その一部をご紹介します。

——読み聞かせは奥が深く、ただ読めばいいというものではありません。活字を音声として聞かせ、内容を正確に伝えなければならぬのです。

読み聞かせを始めた当時、慣れないうちは字を追ってしまい、子どもたちの反応を見る余裕がありませんでした。子どもたちも聞く態度ができていませんでした。集中力が続かないんですね。

その反省を踏まえ、研修会をしたり、プロの話聞いたたり、会員同士でディスカッションをしたりして技術を高めてきました。本の句読点どおりに読むのではなく、意味のつながりを切らずに話すように読むために、音の句読点に替えるなど、文の意味を正確に伝える工夫をしています。

子どもたちも回を重ねるごとに本の内容を理解し、興味を示すようになってくれました。話をしっかりと聞き、むだ話をする子には、周りの子が注意するようになり、今では子どもたちは集中してとても静かに聞いてくれます。子どもが真剣に聞いてくれるときに、やりがいを感じ

ますね。それが素直な評価なんだと感じます。

学校からの反応もよく、子どもたちの学校生活に落ち着きが出てきたと高い評価をいただいています。

会員数が足らず、一人当たりの負担が大きけれど、会員みんながんばってやろうと努力を続けてこままで来ました。継続が大事なのです。

読み聞かせは子どもを本好きにする出発点であり、最も有効な手段でもあります。学校だけでなく、家庭でも読書に力を入れられればよいですね。読書は、本の中から思想家、科学者、偉人、教師の方々と巡り合えて、教えや薫陶を受けて人格の根となり、魂の栄養となつて人間形成に果たす役割は大きいのです。

市の将来を担う子どもたちが、心豊かに健全に成長することを願って会員一同と共に応分の役割を果たすよう、なお一層の努力をいたす所存です。

現在「虹の会」では、会員を広く募集しています。

関心のある方は、お気軽に市立図書館(☎58・3710)までご連絡ください。